

東京驛よりタクシーに乗らむと丸の内驛舎側を歩くに、赤煉瓦壁の古きままに残されたるを見る。多くの煉瓦建ての崩れたる大正十二年の關東大震災にも生き残りたる壁なり。百年の歳月を経たり。この煉瓦なるもの、メソポタミアの昔より使はれ來つづけたるものにて、今の煉瓦、寸法も重さも手にもなじみやすければ、花壇など少しの土いぢりには缺かせぬ材料と言ふべし。その赤さにはゆる知らずなごやかさ、懐かしき感じらるることも理由の一つとおもはる。西歐にては古くよりさかんに用ゐられしが、特に英國にては石材少なきゆゑに煉瓦造り建築多ければ、夏目漱石のごとき外遊経験者には強く印象に残りたるならむ。たゞし倫敦には赤き煉瓦建ては少なし。

明治時代に入り、近代化即西歐化の時代思潮によるところもありて、赤煉瓦の建築物多く實現す。それが傾向の典型は、ジョサイア・コンドルの招聘ならむ。明治政府、近代建築の必要を感じ、二十五歳にしてすでに高名なりしコンドルと契約を結び、今の東京大學建築科の前身の教師とす。弟子四名、いづれも赤煉瓦の使用を心に期す。一方、丸の内の三菱一號館の建築にあたりて三菱二代目の當主岩崎彌之助は、コンドルに赤煉瓦により日本のビジネスの象徴となる建物たらむことを依頼したり。明るき色の煉瓦、日本の息吹を感じさせ、表情微妙に異なる手焼きのレンガの積み重なるの建物、人のチームワークを連想さすと述べたる由。赤煉瓦建物の特長をよく理解せる言といへやう。

コンドルの弟子の首席にて卒業せるが辰野金吾にて、東京驛の建築設計を任され、設計にあたりては外壁を赤煉瓦とす。されば、今回の復元にあたりてはその開業時と同じ材質、色合の煉瓦四十萬枚必要となり、製造のために大變苦勞せりと聞く。規模は遙かに及ばねど、余にそれ似たる経験あれば、その苦勞、理解もでき同情もされたり。余が普連土學園にて百周年記念館建設の窓口擔當となりしときのことなり。講堂の正面に煉瓦壁あり、その講堂の補修にあたりては壁を取り外さざるを得なくなりて、再構築に同質同色の煉瓦を求めむと右往左往せしが思ひ出されたり。この講堂、設計は本校舎と同じ大江宏先生によるもの。大江宏といへば、國立能樂堂などを手掛けし名設計者にて、簡素ながら味はひ深き建物多し。丹下健三とも會を作れる由。されば單なる煉瓦壁といへど、焼き過ぎ煉瓦を使ひての、嚴肅さを保ちながらも人をなごましむる趣、卓越せり。はじめ、「焼き過ぎ煉瓦」と聞きて、「焼け過ぎ煉瓦」の誤りなるかとも思ひしかど、焼く、焼けるの他動詞、自動詞の穿鑿は免も角、「過ぎ」より來るイメージの良からざるに戸惑ひたり。食べ過ぎ、はしやぎ過ぎなど、度を越す意味なればなり。されど現物の焼き過ぎ煉瓦はその名に似ず、密度も高くて透水性低き高品質の煉瓦にて、しつかり組合はすれば地震にも強き構造體になるものなりと聞きたり。さなきだに、その小口などに焼けたる黒き色の混じりたれば、茶器の名物にもまがふほ

どなる風情あり。是非この材質の煉瓦欲しと探せども、こは高温にて焼成するものなれば強烈なる煙立上り、公害の元兇になるとて日本にては製造禁止、韓國にても又焼く工場なしとか、三十年程も昔のことなり。さりながら、今回の東京驛に先立ちて復元されし、丸の内三菱一號館にては、創建當時と同じ煉瓦の必要二百三十萬箇に及び、昔と同じ製法をと中國にて調達せし由、北京の大氣汚染近年殊に甚しきは、かかる煉瓦の製造も一因をなせるかと、往時を偲び感慨一段と深し。